

The Saitama Municipal Urawa Museum

みんなかえんだより



第24号

2003. 3

of Traditional Architecture News No.24

浦和くらしの博物館民家園館報

虫籠窓



▲ ムシコ窓（解体前：旧綿貫家住宅）



▲ 荒打ち



▲ 2回目の砂ずり



▲ 窓の額をつくる

縦格子の風情が虫籠に似ていることから「虫籠（ムシコ）窓」と呼ばれています。塗り屋造りの2階窓に多く見られ、格子も土で塗り込められています。

旧綿貫家住宅のムシコ窓の上半分は、2階の軒裏部分を防火のために粘土と漆喰で厚く塗り込めた「ハチマキ」が幅広く覆っているため、窓の両脇の壁は上にいくに従って厚くなり、独特の雰囲気をかもしだしています。

## 旧綿貫家住宅移築復原の進行状況 — 3 —

今回はいよいよ壁塗りの工程を紹介します。前号に記した小舞に壁土を塗り重ねていきます。解体の時には何層にも重なった土壁を確認することができましたが、それはすべて同じものを塗り重ねたもののように見えました。しかし、実は粘土と砂を交互に重ねていたものでした。100年以上の歳月が土と砂を同じ状態にしていたのです。

### ● 荒打ち

壁土は「荒打ち」という作業から始まります。

県内北部の深谷から妻沼にかけて取れる荒木田土に長めに切った藁を混ぜ、団子状に丸めた土を小舞に打ちつけるように塗っていきます。四人一組となり一人が土をこね、一人が投げ上げ、もう一人がその土を受け、最後の一人が手で塗り込めていきます。

小舞が組まれた面は竹に巻かれた縄と絡みあいます。一方、柱面は縄が巻きついていないので、土を塗った後にバッシンに縄を巻いて絡ませていきます。軒下の「ハチマキ」部分は厚く塗り込めるために丸竹に縄をからめたものを3本取りつけた上に荒打ちし、ゆるやかな突出部を作り出します。建物内部からは、右下の写真のように縦横に組んだ竹の間から押し出されるような状態で土が絡みついているのが見てとれます。



▲ 荒打ち



▲ 内部

荒打ちが終わると、壁に穴をあけ、縄を入れていきます。外側から内側を通りまた外側へと建物を一周し、全部で3段の縄をかけます。この縄は後の工程で使用します。

荒打ちがよく乾燥した後、鏝を使って内側を塗り返し（返し壁）、さらに乾燥させます。

### ● 砂ずり①

よく乾燥したら、外壁は「砂ずり」といって砂

に荒木田と細かな藁を混ぜたものを1cm程度塗り重ねます。土と土を塗り重ねたのでは接着が悪いため、砂ずりを塗り、荒壁を塗るというふうにします。前記の縄は、塗り込めずそのまましておきます。砂ずりしたところは、次の壁土がのりやすいように鏝で刻みを入れておき、よく乾燥させます。



▲ 砂ずり後、刻みを入れる

### ● 細部の下塗り

庇やムシコ窓、下屋の先端の下地は、棕櫚縄を細かく巻き、その上に漆喰を塗りました。他のものを下地に塗る職人さんもいるそうですが、旧綿貫家を作業している職人さんは「漆喰を塗った方が強い」ということをお話して下さいました。漆喰は、日高産の「ツノマタ」という海藻を煮出して作った糊の中に麻縄をほどいて作った麻と石灰を混ぜて作ります。海が冷たいほどいい糊ができるそうで、日高産の海藻は最高なのだそうです。

### ● 下縄入れ

砂ずりした面の乾燥が終わると、「下縄入れ」の工程に入ります。まず、隅の部分に板をあて、水平を保ちながら壁土の厚さの見当をつけます。そして、荒木田土に5cm位に切った藁を混ぜた荒壁を3cm程鏝で塗っていき、次に、荒打ちの時に取りつけた横縄の内、上2段にそれぞれ5～6cmの間隔で縄を釣り下げ、鏝で押しつけるようにしながら荒壁の中に埋め込みます。ハチマキの下部から土台の上のすべての平面に縄が入れ終ると、ハチマキ部分の縄入れを行います。



▲ 下縄の塗り込め



▲ ハチマキ部分の縄入れ

## ～壁塗り～

ハチマキ部分には横縄が入っていないため、荒壁を塗った後、縄を上下に、直接荒壁に貼りつけながら縄を入れ、縄が飛び出ないように上下に釘を打ち込んでおきます。

寒い冬の時期が、壁塗りには中に入れた藁が腐りにくく、また、北風が土の乾燥を助けるということで良いとされていますが、この下縄入れは、暖かい気温10℃以上の方が作業がしやすいということでした。荒壁を塗った後に縄を入れていくので、6℃前後の低い気温では荒壁が締まり過ぎてしまうのでしょうか。ちょうどこの作業は、10℃を越えた穏やかな日に行われました。

### ● 砂ずり②

次の工程に入るためにまた砂ずりを行います。前回と同じく1cm程度塗り、刻みを入れておきます。ただし、ハチマキの部分は砂ずりの材料が異なります。仕上げに近くなっている理由もありますが、外側に張り出した部分の壁土が落ちないようにさらになじみやすいものを塗り、刻みも細かく入れておきます。

砂に荒木田土、古い土壁を砕いた土、「モミツタ」と呼ぶ藁をこねたものを使います。「モミツタ」は市販のものもありますが、細かすぎてからみつかないということで、今回は養蚕で使用した30年物のムシロを細かく切って使いました。細かく切ったムシロを手でもみほぐしながら土と混ぜると、よく絡みついて砂や土と混ざるそうです。古い土壁を使用するのもなじみが良くなるということで混ぜ合わされています。また、ハチマキ部分はこの段階で水系を張り、あやふやであった境をはっきりさせました。



▲ ハチマキ部分の砂ずり

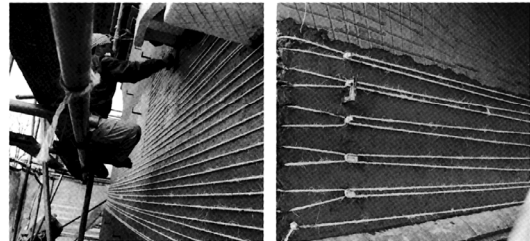
### ● 腰巻の縄入れ

土台の上に厚く塗り込めた部分を「腰巻」といいます。この腰巻を作るために、2回目の砂ずりが終わった後、土台から80cmのところから細い角材を回しておきます。この角材から下の部分に荒木田土と藁を混ぜたものを3cm位鏝で塗っていき

ます。塗り終ると、荒打ちの時に入れた横縄の最下段部の縄にやはり5～6cmの間隔で縄を釣り下げ、鏝で押し込んでいきます。

### ● 樽巻

腰巻以外の壁に、今度は横方向に縄を入れていきます。側面から仕事を始め、やはり隅に板をあてて見当をつけ、3cmの厚さに荒木田土と藁をこねた土を鏝で塗っておきます。次に横縄を張りますが、縦縄と違って引っかけるところがありません。そこで、正面と背面に釘を仮打ちし、その釘に引っかけて横縄を張り、鏝で押し込んでいきます。



▲ 縄入れの後、鏝で押し込む

▲ 竹釘で縄を止める

側面が終わると正面に縄を入れます。先に仮止めした釘を抜いて土を塗り、正面入口際を仮止めした位置に竹釘を打ち込み縄を張ります。竹釘はちょうど節の部分が釘の頭となり縄をしっかりと抑えます。また、仮止めした位置に打ち込んだ竹釘は、側面の縄と正面の縄を一緒に引っ張り合う形で止めています。この釘は、縄を掛けた後は壁の中に打ち込まれます。背面も同様に縄を入れていきます。



▲ 竹釘

ハチマキは、水系を張ったところに細い角材をあてがい、4.5cmの厚さで土を塗っていきます。縄は同じように竹釘を両端に使うて入れていきますが、ハチマキの最下段の縄は、始めから12cm前後の間隔で竹釘を縄の間にはさみ込んでおき、打ち込んでいきます。竹釘の節は縄から外れないように上を向いています。

次号は、復原工事の最終回、完成までをお伝えします。